

在日コリアンの若い世代はどのようなリアリティを生きているのか

—ある青年のライフストーリーを事例として—

筑波大学大学院 井上恵子

1 目的

若い世代の在日コリアンは、在日コリアンの権利獲得や解放のための社会運動が弱体化などに伴い、自らが、在日コリアンであるということを確認する足場を失いつつある。そのような状況の中でも自らを「在日」として語り、日本社会の中で生きている人々がいる。では、彼らは一体どのように自らを意味づけ、生きているのかという疑問が本報告の議論の出発点である。

本報告の目的は、若い世代の在日コリアンが「在日コリアンとして」生きることによってどのような意味づけを行っているのかということをはっきりとすることである。さらに、その意味づけを通して、彼らが社会とつながろうとする論理、彼らの生のリアリティを描き出すことである。

2 方法

そこで、一人の青年のライフストーリー・インタビューの語りを用い、対話的構築主義に基づいて分析を行った。在日コリアンの若い世代と一言と言ってもそれぞれ一人一人のおかれた状況は階層、ジェンダー、社会的地位など様々な面で多様である。ゆえに、本報告で取り上げた一人の個人としての在日コリアン青年の語りを在日コリアン青年全体のものとして一般化することはできない。しかしながら、桜井厚が言うように個人の経験や人生は語りを通して人に共有され、社会の経験や歴史の属するようになる(桜井 2002:36)という言葉もまた軽んじではならない言葉である。本報告においては、語り手の主観的なリアリティに基づいたライフストーリーを、〈私〉を前にして、それが語られたのか、ライフストーリー・インタビューが行われた「場」での〈私〉と語り手の自己呈示のせめぎ合いも含め、丹念に読み解いていくことによって、語り手にとっての他者とのつながりのあり方、在日として生きているというリアリティを描き出せると考えた。

3 結果

分析の結果、語り手は自らが在日として生きることを意味を、「民族的」なものに距離をとりつつ自分なりの論理を用いて「在日である」自分を語っていた。さらに、語り手は他者との出会い、そして、その相互行為の中で新しい自己理解を常に作り上げていた。

4 結論

「民族」なるものへの距離の取りながら「在日」であることを語ることは、自らのルーツである「コリアン」である部分は認めつつも、そこを超えた新しい自己理解の創造である。語り手は在日コリアンである自分自身を「民族」ではなく「在日とは何か」という問いにさらされる「マイノリティ」として位置づけ、他者とのつながりを通して社会の中に生きその経験をもってして「在日コリアン」である自分を語っているのである。

参考文献

桜井厚,2002,『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』,せりか書房